Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

高等学校女子生徒の育児観について

西本　脩
（大阪樟蔭女子大学）

Ⅰ　調査の目的

育児と幼児教育は、一つの世代から次の世代へと、命と文化を結ぶ家庭の最も重要な役割の一つである。特に0才から3才頃までの乳幼児の養育と、幼児教育の時期における親子関係・家庭環境・両親のあり方などが、その人間の一生の人格形成にきわめて大きな影響を与えることを考えると、育児と幼児教育の問題は特に重視せられなければならないと思う。

そこで、やがて高校を出て社会人となる者もあれば更に大学等に進学する者もあるだろうが、いずれは結婚し母親となる現在の高校女子生徒が、育児や幼児教育についてどのように考えているのであろうか。彼女たちの育児観を調査してみたいと思う。

Ⅱ　調査の方法

調査の手続き　以上の目的で行った調査の方法は質問紙法である。

調査の対象　大阪府立Y高校・I高校および私立M高校・S高校の1年生から3年生までの女子生徒、計1136名である。（第1表参照）

調査の期間　昭和56年10月3日～10月29日

Ⅲ　調査の結果および考察

1、「あなたは乳児（0～2才）が好きですか？」

全体の83.0％の者が「好き」と答え、大多数を占めている。しかし「あなたは幼児（3～6才）が好きですか？」（第Ⅱ問）に対しては、「好き」と答えている者が64.9％に減少している。乳児は従順で可愛いが、幼児期ともなると、自我が芽生えて反抗的になるため、「好き」と答えるのに少し抵抗を感じたためであろう。（第1図参照）

乳児も幼児も共に好きと答えた者は、1年生の55.5％、2年生の61.8％、3年生の63.9％で、僅かずつではあるが、増加する傾向が見られる。母性という女性特有の性質が高校時代に、次第に芽生え育ちつつあることを示しているのであろう。（第2図）

2、「あなたは結婚したら子どもがほしいですか？」（問Ⅲ）については、全体の88.6％の者が「ほしい」と答えている。「何人ぐらいほしいと思いますか？」という問に対しては「2人」と答えた者が67.6％と最も多く過半数を占めており、次いで「3人」と答えた者が21.5％となっていて、この両者で全体の89.1％を占めている。

次に、何故その人数の子どもを希望するのか理由を尋ねてみたが、「2人ほしい」と望んでいる者では「1人っ子はかわいそう」が23.6％で、次いで2人が「ちょうどよい人数」と考えている者が17.2％であった。「3人ほしい」と考えている者では、3人が「ちょうどよい人数」と思っている者が21.3％で最も多く、「楽しい」が10.1％と、これに次いでいる。

次に、現実のきょうだい数と、将来欲しいと望んでいる子どもの数との関係についてみると、第2表のようになる。現実にきょうだいのいない1人っ子では、「子どもは1人でよい」と考えている者は僅か2.2％しかいない。子ども数2人を希望する者が67.0％、3人を希望する者が26.4％となっていて、現実の子ども数よりも多くを希望していることがわかる。これは、やはり自分がきょうだいのない淋しさを、身にしみて体験してきたからではなかろうか。

次に、現在2人きょうだいの者と、3人きょうだいの者とを比較してみると、前者では後者よりも、子どもを2人希望している者が多く、後者では前者よりも、子どもを3人望んでいる者が多くなっている。同じようなことは、4人以上きょうだいがある者についてもいえる。以上の結果から、現在一人っ子である者を除けば、自分が欲しいと思う子どもの人数には、現実の自分のきょうだい数が多分に影響しているといえよう。

3、「あなたは結婚後の仕事と育児をどのようにしたいと思いますか？」という問Ⅳについては、「育児に専念したい」が35.4％を占めて最も多く、次いで「子どもの手が離れれば、また仕事を続けたいと思う」が25.9％、「その時にならないとわからない」が25.5％と続いている。前者の答は「子どもの手が離れるまでは、育児に専念したい」という意味にもとれるので、「育児に専念したい」と合わせると61.3％と過半数を占めるようになる。

他方、「子どもを保育園へ入れてでも仕事を続けたいと思う」は4.0％で、「家で子どもを見てくれる人がいれば、仕事を続けたいと思う」は6.3％となって

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

いて、両者を合わせても「仕事志向」は10.3%にすぎない。

「育児に専念したい」と考えている者（402人）の理由を尋ねたところ、「仕事と育児、両立の自信がない」が9.5%で最も多く、以下「自分の子どもは自分の手で育てるべきだ」が9.2%、「（育児に専念しなければ）子どもがかわいそうだ」7.2%、「子どものそばにいてやりたい」5.2%、「子どものために」5.0%、「ちゃんとした子どもに育てたい」5.0%の順になっている。

また「子どもの手が離れれば、また仕事を続けたい」と答えた294人については57.1%が無回答であり、「小さいころは母親が必要だから」、「子どものためにお金がいるから」、「子どもがある程度自分のことができるから」の三つがいずれも7.1%で、「ひまになるから」が5.4%、「一日中ついていなくても大丈夫」が3.4%となっている。

他方、「家で子どもを見てくれる人がいれば仕事を続けたい」理由としては、「経済的に考えて」が13.9%、「自分の好きな仕事だったらそうする」が5.6%の順になっている。

また「子供を保育園へ入れてでも仕事を続けたい」理由としては、「生活費をかせぐため」、「どうしてもしたい仕事がある」がそれぞれ8.9%となっている。

次に「子供の手が離れれば、また仕事を続けたいと思う」と答えた者に対して、そのときの子供の年齢を尋ねたが、「10才以上」と答えた者が51.7%となっている。また「10才未満」という答は34.2%となっている。これらの結果から、子どもの手が離れる年齢としては10才ごろを考えているようである。

4、「あなたは乳児を育てるのに大切なことは何だと思いますか？」という質問Vで、愛情・経済力・環境・栄養・とり立てて気にしなくても子どもは育つ・その他という項目を設け、一番大切と思われるものから順位をつけさせた。第1位には6点，第2位には5点というように点数化して、その合計点を計算した。（第3表参照）愛情が5860点（27.9%）で、乳児を育てるのに一番大切な事柄とされている。第2位に環境があげられている（4783点，22.8%）が、乳児を育てるためには、回りのいろいろな環境の影響を受けることが大きいからであろう。第3位は栄養（3833点，18.2%）と経済力（3803点，18.1%）が甲乙をつけがたい程度であげられている。それから「とり立てて気にしなくても子どもは育つ」が1869点（8.9%）と続いている。

5、「あなたは育児についてどのように思っていますか？」という質問Wで、「育児はめんどうなことだと思う」、「育児はむずかしそうだと思う」、「育児はすばらしいことだと思う」、「育児はぜひ経験してみたいと思う」、「育児は絶対にしたくないと思う」、「育児はできるだけしたくないと思う」、「育児は自分の時間がなくなってしまうと思う」、「育児は愛情がなければできないと思う」、「育児は根気のいることだと思う」、「育児は自分の生きがいになるだろうと思う」、「育児は疲れるだけのように思う」、「育児は喜びを与えてくれると思う」、「育児ができるようになるのが楽しみである」、「育児についてまだ考えたことがない」の各意見について、それぞれ、はい・いいえ・どちらでもない・わからない、のいずれに当てはまるか、分けさせた。（第4表参照）

各意見をまとめてみると、育児というものは、難しそうで、根気のいることだが、決して疲れるだけでなく、時には喜びを与えてくれるもので、愛情がなければできない、すばらしいことだ、と思っていることがうかがえよう。そして、女子高校生の76.3%の者がぜひ経験してみたいと思っており、51.1%が育児ができるようになるのを楽しみにしているようである。

まだ「わからない」と答えた者が最も多かった意見は、「10.育児は自分の生きがいになるだろう」で、生きがいを感ずるかどうかは、実際にやってみなければわからないことで、若い未婚の女子高校生にとっては当然であろう。「3.育児はすばらしいことだと思う」「7.育児は自分の時間がなくなってしまうと思う」も、育児について未経験の女子高校生にとっては、わからないのが当り前だろう。

また「14.育児についてまだ考えたことがない」という意見についての賛否を学年別に比較してみると、図のようになる。（第3図参照）

Ⅳ 結 語

全般的に見て、多くの女子高校生は乳幼児に対して好意的な意見を持っており、「子供が好き」という者は、学年とともに増加している。また「育児について考えたことがある」者も、学年が進むにつれて増加している。平井信義氏らの「母性愛の研究」によると、子供に対して関心を持つ者が、中学・高校・大学と年齢の上昇とともに増加する傾向があるようだが、同じようなことが私たちの調査でも見られた。

母性意識の形成は、中学から高校にかけて、年齢とともに徐々に行われていくといえよう。

NII-Electronic Library Service